

### プラトン『プロタゴラス』篇と現代

山口, 誠一 / YAMAGUCHI, Seiichi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

78

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2019-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021783>

# プラトン『プロタゴラス』篇と現代

山口 誠 一

筆者は、普段は、なるほどドイツ近現代哲学とりわけヘーゲルやニーチェを中心に本学哲学科では語ってきた。しかし、本論稿では、古代ギリシャのプラトンが書いた対話篇の方から近代哲学を経て現代哲学に投げかけられた光と落とされた影について、筆者なりの考えを述べておく。

端的に言って、プラトン著『プロタゴラス』篇の光と影が知の歴史の中で明確になったのは、ヘーゲルによる学知の弁証法のおかげである。そして、その上で影から知の光を見ようとしたのはニーチェである。さらに、『プロタゴラス』篇で照らし出された行為を支配する知識への問いを再度照らし出したのはウィトゲンシュタインである。こうして、現代に到るまで、哲学は、プラトン対話篇の問いかけをめぐっているといえる。

## 第 I 章 プラトン対話篇の読み方

さて、プラトン対話篇が書かれた古代ギリシャから現代に到るまで、プラトン対話篇を理解しようとする研究が連綿といかにもなされてきた。だが、依然としてプラトンはどうも大いなる謎であり、端的に言えばこれまでの理解は誤解かもしれないことにいま気づき始めたのではないかと思う。つまり、対話篇の著者プラトンが笑いながら作り出した虚像を、これまで実像として真剣に追いかけていたのかもしれない。

というのも、『パイドロス』篇には、「文字の園に種子を播くのは戯れのためである」(276d) というせりふがあるからであり、第7書簡では「わたしが真剣になっていることどもについてのわたしの著述はないし、また、今後もけっしてないだろう」(341c) と明言しているからである。

まず、プラトンの著述は、主に対話篇という戯曲作品であり、プラトン本人は原則として登場しない。したがって、対話篇のどこまでが、プラトンの哲学的言明であるかは、明らかではないのである。

しかし、『プロタゴラス』篇という対話篇の著者がプラトンであることは確実である。したがって、当該対話篇という作品全体にプラトン哲学が表現されているのである。その作品の登場人物ソクラテスがプラトン哲学の代弁者であると考えたり、プロタゴラスは、その代弁者ソクラテスの敵対者であるとして両者を区別するだけでもあってはならないのである。

ところで、プラトン著『プロタゴラス』篇という対話篇は、全体として次の4点を表明している。

第1に、徳が、行為を支配する知識であることを本当に知っているのかという問いが設定されて

いる。

第2に、その問いへの応答が、ソクラテスとプロタゴラスとの間で善悪の知識が快樂に負けるという無抑制をめぐる問答を通して探究されてゆく。

第3に、その結果、無抑制であるかに見える現象は、実は善悪の計算知に関する民衆の無知に由来することが明らかにされる。

第4に、そのことに同意したプロタゴラスも、民衆の無知の次元を計算知の次元へ高める思慮(フロネーシス)としての知識に関してさえも無知であることが暗示される。

## 第Ⅱ章 知識への問いとプラトン

『プロタゴラス』篇は、徳ないし卓越性は知識であることについてのプロタゴラスの無知(補論1)とソクラテスの無知の知を全体として表明している。この無知と無知の知を分かち知識観をめぐる問答にプラトンの表明の中心がある。

すなわち、プラトンは、プロタゴラスの無知とソクラテスの無知の知を区別する知の根拠を対話篇の登場人物に語らせることなく、対話篇の著者つまり対話篇の黒子として暗示しているのである。そして、そのことによって、知恵ないし知識とは何かという問いに現代にまで達する射程を持たせたのである。

いうまでもなく、哲学とは、知識を所有する営みであるよりは知識を探究し続ける営みであり、『プロタゴラス』篇は、その探究を行為との関係で現代に投げかけているのである。

ソクラテスは、プロタゴラスも認める知識観について次のように述べている。すなわち「知識は立派なものであって、人間を支配する力を持ち、いやしくも人が善いことと悪いことを知ったならば、何かほかのものに屈服して、知識の命ずる以外の行為をするようなことはけっしてなく、思慮こそは人間をたすけると、このようにお考えでしょうか」(352c)とプロタゴラスに問いかけているのである。

ここで、ソクラテスは、要するに、人間の行為を支配する知識、善いことと悪いことについての知がいかなるものかという問いを設定しているのである。そして、無知というのは、この知識についての無知なのである。さらに、善いことと悪いことについての知が行為に命じ、行為を支配するというこゝを、『プロタゴラス』篇は次のように表現している(332d~e)。

「そして、分別ある行為をなさしめるものは、分別であり、無分別な行為の仕方をなさしめるものは、無分別だということも」。

プロタゴラスは認めた。

「では、この二つの行為のあり方は反対のものである以上、それをなさしめるものは互いに反対のものだということになるのではないか」。

「そうだ」。

「しかるに、一方の行為をなさしめるものは分別であり、他方の場合は無分別であるね」。

「そうだ」。

ここで、善いことの知としての分別は、行為主体としての人間の存在根拠なのである。そのような存在根拠としての知が、人間の行為に命令し支配するわけである。

このようにして、プラトンは、『プロタゴラス』篇では、何よりも徳をめぐる対話問答による問いかける人として著述しているのである。

### 第三章 『プロタゴラス』篇のテーマと対話問答法

そこで、その対話問答のテーマと対話方法について手短かに述べておく。

(A) 対話問答のテーマは、無抑制の否定である。

(a) 無抑制を否定する筋道

『プロタゴラス』篇に従えば、無抑制の現象は、次のように定式化できる。a) もっとも善いことを知りながら、しかも、それを行うことができるのに、そうしようとはせずに、ほかのことを行う人たちがたくさんいる。b) この状態の原因は、知識以外の快楽や苦痛などの力に負けるからである。

b) から考えるならば、無抑制とは、善悪の知識に背いて、快楽への欲望に身をゆだねるがゆえに「快楽への敗北」といえよう。したがって、無抑制を否定するためには、b) に対して、知識の方が、快楽や苦痛の力に負けることはない論駁しなければならない。また、a) に対しては、何がもっとも善いことかを、知りながら行わないという事態が成立しないことを、快苦の計算知識の水準で論証しなければならない。

そもそも、民衆の快楽主義とは、行為では「快楽を善いこととして追いかけ、苦痛を悪いこととして避ける」(354c) ことにある。したがって、ここでは、善は快楽であり、悪は苦痛であるということが、前提されていることを、『プロタゴラス』篇はまず明らかにする。無論、ここでは、善悪は、快楽と苦痛の次元、つまり欲望の次元へと引き下げられているのである。

(b) 民衆の快楽主義に対する論駁の2つの次元

1) 欲望の次元 (民衆の快楽主義)

まず、欲望の次元での、快楽と苦痛との関係は、次のように図示される。

過食 (現在)	→	腹痛 (未来)
快楽の量 (プラス3)	→	苦痛の量 (マイナス2)

この次元では、快楽と苦痛とは、共に瞬間的であり、両者の関係は、時間的継起の関係にある。また、現在の快楽は、過大となり、未来の苦痛は、過小となる。

## 2) 快苦の測定の次元 (知性的快樂主義)

しかし、ここに善悪の知を持ち込むと、計算的知性が参与してくる。なぜならば、快苦の計算にもとづいて眼前の快樂や苦痛が善いことか悪いことかを、計算結果としての基準を見つめながら判定することが、まさに、善悪を知ることだからである。

過食	→	腹痛	計算結果
プラス2	+	マイナス3	= マイナス1

この場合、過食という快い行為は、計算結果が、マイナスとなっているので、悪いと評価される。したがって、過食という行為が悪いということは、以上のような意味で成立するのである。

### (B) 対話の方法

このようなテーマをめぐる対話の方法については、プラトンの対話篇『プロタゴラス』篇では、演説と問答との対比として、鮮やかに描かれている。

ソクラテスはこう述べている。「そういった誰かにさらに質問してみると、彼ら〔ソフィストたち〕は、ちょうど書物と同じように、何も答えることもできなければ、自分の方から問いをかけることもできない。もし誰かが、言われたことについて何かちょっとした質問でもするならば、まるで銅の器が、一度たたかれると長い間鳴りひびいて、人が手で押さええないかぎり鳴り続けているように、弁論家たちも、ちょっと質問を受けると、たちまち千里の長広告をくりひろげるものだ。だが、このプロタゴラスはちがう。この人は、現に事実そのものが証明しているように、長い立派な演説をすることもできるが、他方ではまた、質問を受けて手短かに答えたり、問いをかけてから相手の答えるのを待って、それを聞き入れることもできる人だ」(329a-b)と。

このように、ソクラテスによれば、プロタゴラスというソフィストにも造形的(プラスチック)問答が可能なのである。簡単に言えば、それは一問一答の方式なのである。

それは、両者を調停するべく、ヒippiasが述べたことによく現われている。「そして、一方で君〔ソクラテス〕は、短く区切って言葉をやりとりするというあの厳格な対話方式を、それがプロタゴラスにとって快いものでないかぎり、あまり過度に求めることをやめ、言論(ロゴス)の手綱を解きゆるめて、言論がもっと堂々として優美な姿を私たちに現すことができるようにしたまえ」(338a)と。

対話問答は、ここでは、無知から無知の知へ到る探究法だったのである。この行為を支配する知と無知との関係を光と影との関係にしたのは、哲学の歴史を現代哲学へと導いたヘーゲルである。

ヘーゲルは『論理学』第二版序説で、『論理学』の叙述の厳密さを語るときに、プラトンの対話篇に言及し、ソクラテス的な問答法を賛美しているので、弁証法も問答法に源泉があったのではないかと考えざるをえなくなる(補論2)。ヘーゲルによれば、a) 厳密な哲学的叙述は、造形的であり、b) それを聞いたり、理解したりする者は、造形的精神を持っている。

このようにして、造形的会話では、問われていることだけに、はっきりと答え、問われていないことも話題にするような答え手の恣意は排除されている。ヘーゲル『哲学史講義』によれば、「したがって、私たちは、対話の際に話し合う者たちが、自分の思いつきや他の論点を持ち出すことはなくて、正確に問われている関連で答えるということに驚くことはない。これが会話の造形性なのである」(VGP 2, S. 138)となる。

このようにして行為を支配する力を持っている知識をめぐる問答こそ、『プロタゴラス』篇の全体であり、著者プラトンなのである。そして、当該問答こそ現代文明そして現代哲学に光を投射し、影を落としてもいるのである。ヘーゲルは『精神現象学』を書いて、行為を支配する知の光の極限に絶対知を据えた。それと同時にその絶対知を意識経験の果てで生み出すために、相対知を一つ一つ否定してゆくという影の領域を描き出した。さらに、影から光へ転ずる探究の問答を思弁弁証法の『論理学』へ練り上げてゆかねばならなかったのである。

#### 第IV章 『プロタゴラス』篇の落とす影

さて、『プロタゴラス』篇に戻ると、このような対話の方法を通して、無抑制であるかに見える現象は、実は善悪の計算知に関する民衆の無知に由来することが明らかにされる。

民衆の快楽主義にあっては、行為について、すでに述べたように次のことが前提されている。つまり、「快楽を善いこととして追いかけて、苦痛を悪いこととして避ける」(354c)という前提である。したがって、過食は、快苦の計算の結果、苦痛とされ、悪いこととして避けられる。してみれば、先ほどの無抑制の主張 a) の「もっとも善いことを知りながら」は、実は成立しないこととなる。こうして、無抑制と見えた現象は、もっとも善いことについての計算欠如という意味での無知に由来することとなる。

この主張に従えば、人が善悪について正確な知識を持っていれば、彼は必ずこの知識に従って善い行為をする。だから、反対に人が悪いことを行う場合には、彼が無知の状態にあることになる。したがって、もしも無抑制が、「知りながらにして、この知に反して悪いことを行う」という事態を意味するならば、無抑制は存在しないわけである。

ところで、ヘーゲル後、行為を支配する知性の光を否定し、無知ないし無意識という影こそ身体自己として行為を支配することに重点を移したのは、ニーチェである。「個体保存のための手段としての知性は、その主たる力を偽装において発揮している」(KSA1, S. 877)というニーチェの言明では、偽装という知性の影がいわれているだけである。そして、ニーチェは、己れがソクラテス側ではなくてプロタゴラス側にいることをつぎのように明言している。「われわれの思考様式は、高度にヘラクレイトス的であり、デモクリトス的であり、プロタゴラス的である……。たんにプロタゴラス的だけでも十分である。なぜならば、プロタゴラスは、ヘラクレイトスとデモクリトスの両者を合わせ持っていたからである」(KSA 13, S. 293)。

そもそも注意すべきは、ニーチェ『古代レトリック講義』でも言語に関して「言語は、主観的な刺激や想定を別のものに転移させようとする」(KGW II/4, S. 426) とのべていることである。また、こうも明言している。「言語は、臆見 (δόξα) だけを転移させようとするのであって、認識 (ἐπιστήμη) を転移させようとはしない」(ibid.) と。

このようにして、真理を探究するための概念言語よりも仮象の影を表現するレトリック言語の方を、ニーチェは重視した。

## 第V章 『プロタゴラス』篇の投げかける光

さて、『プロタゴラス』篇に再び話を戻すと、民衆の無知に同意したプロタゴラスも、民衆の無知の次元を快楽と苦痛の計算の次元へ高める思慮としての知識に関しては無知であることが暗示される。

ここで注意すべきは、快楽と苦痛の量を計算する知性の次元と快楽への欲望の次元を区別し、前者を優先するための知の根拠である。ソクラテスは、この根拠に関する無知を知っているが、プロタゴラスは、知っていると思い誤っているのである。この根拠は、『プロタゴラス』篇では暗示されているだけである。そして、登場することなくして問答を書いている謎の著者プラトンは、現像写真のポジに対するネガフィルムのように浮かび上がってくるのである。

ニーチェ以降、『プロタゴラス』篇の行為と知識の関係をめぐる問いに立ち返ろうとしたという点では、ウィトゲンシュタインの絶筆遺稿『確実性の問題』(1979)を挙げることができるであろう。ウィトゲンシュタインは、知識の問題を「わたしはpを知っている」という哲学的文法命題の次元で問い直したのである。『確実性の問題』第427節でこうのべている。「その人がたとえ『わたしは……を知っている』という言葉も用いなくとも、その人の振る舞いがその知識をあらわにすることとを明らかにしなければならない」(ÜG, S. 55) と。たとえば、筆者が、向こうにドアがあることを知っていることは、筆者が外出しようとする行為が前提し、筆者の行為を意味あるものにして支配しているのである。そして、そのような個々の知識の価値は、知識の体系の中で成立することをウィトゲンシュタインは、当該遺稿第410節で明言している。「私たちの知識はいっぱしの大きな体系をなしている。私たちが、個々の知識に認める価値は、この体系の中でだけ成立する」(ÜG, S. 52) と。さらに、そのような知識体系を世界像 (Weltbild) としての基体と第162節で明言している。「私にはいっぱしの世界像がある。それは真であるのか、偽であるのか。とにかくその世界像が、私のあらゆる探究、すべての主張を支える基体なのである」(ÜG, S. 23)。この世界像には、その反対を信じさせたりするものは含まれてはなくて、その世界像は、検証されることもできない「神話の体系 (Mythologie)」(ÜG, S. 15) なのである。まさに、この世界像を像たらしめる根拠への問いがここで生まれて来ざるをえず、ここに対話篇を書いたプラトンの影を現代にあって見ないわけにはゆかないであろう。

## (補論 1)

ここで『プロタゴラス』篇のいう無知を、いわゆる実践的推論をてがかりにしてさらに分析してゆくことにする。実践的推論は、目的論的説明の逆転である。

**大前提：**A は、p を生じさせようと意図する。

**小前提：**A は、a をしなければ、p を生じさせることができないと考える。

**結論：**したがって、A は、a にとりかかる。

行為者 A に対して、行為 a をなしたのはなぜなのかと問うならば、「p を生じさせるためである」という大前提の答えが、返ってくるはずである。実践的推論とは、いうなれば、意図から行為にいたる行為者の考えの筋道を述べたものである。つまり、行為者が実行したのはなぜかということについて、行為者が、どう考えていたのかということを書いたわけである。A は、a にとりかかるということを結論とする実践的推論は、通常の推論とは、この点で異なるのである。

ところで、その上で注目すべきは、まず大前提「A は、p を生じさせようと意図する」が意味している意図の内容は、目的だということである。そして、小前提では、a という行為が、その目的を実現するための手段であり計算知も含む。こうして、説明されるべき行為 a とは、その行為 a そのものとは別の目的を実現するための手段であり計算知なのである（山口誠一『クリエートする哲学——新行為論入門』、弘文堂、2007年、33頁～34頁参照）。

してみれば、『プロタゴラス』篇のいう無知とは、大前提の善ばかりではなくて、大前提に根拠づけられた小前提の善への無知をも含んでいる。実践的推論では、大前提と小前提がなければ、結論たる善い行為が出てこないという意味で、『プロタゴラス』篇では、無抑制とは、善と悪に関する無知なのである。つまり、無抑制では、行為を推論で制御する知識が存在しておらず無知に陥っていることになる。

ところが、ネオプラグマティストの D. デイヴィッドソンは、1985年に刊行された『行為と出来事』で、無抑制を実践的推論を手がかりに考察しながらも、「行為者の知恵の全体に訴えなくても無抑制は意味をなす」(EAE, p.40)として大前提と小前提という区別を可能にする根拠へ投げかけられた『プロタゴラス』篇の光を消したのである。

## (補論 2)

弁証法の淵源から対話問答について、『プロタゴラス』篇を手がかりに手短かに考察することにする。ヘーゲル哲学体系構築の方法である弁証法（ディアレクティケー）が、ソクラテス的な対話問答（ディアロゴス）と関係があることは、しばしば指摘されてきた。たとえば、中村雄二郎氏は、つぎのように理解している。「〈対話〉のことをギリシア語ではディアロゴス（dialogos）と言ったが、ロゴスとは問題になっている事柄の真理や真相という意味であり、ディアとは分ける、分有するという意味であった

から、対話とは事柄の真理、真相を分け合うことであり、もっと言えば、対話はロゴス（真理、真相）に導かれて展開されることになる。このように、対話においてロゴスを分け合うこと、そして、対話は問題自体のうちにひそむロゴスに導かれて展開されるべきであること、この二つは対話というものの、もっとも基礎的な要点である」（中村雄二郎『述語集——気になる言葉——』、岩波新書、1988年、172頁）と。その上で、『テアイテス』篇の自己内対話の箇所を引用して「思考とくに哲学的思考とは、自己内対話によるロゴスの自己発展でなければならないのである。また、それは、対話とロゴス（ことば）を介して他者に開かれていることにもなるわけだ」（同書、173頁）としている。このような理解は、弁証法と対話問答を関係づける際になされるいかにも典型的なものである。

しかし、ここで、問題なのは、対話が自己内対話になったとき、ロゴスを分け合うという点が曖昧になることである。それは、哲学的思考が他者に開かれているという説明では解決されえない。そして、概念の自己運動を特質とするヘーゲルの弁証法も、典型的なロゴスの自己発展に帰着し、そこで対話という特質はきわめて見えにくいのである。

しかし、ヘーゲル自身は、人物や対話問答の造形性という視点から、対話問答は、自分の学問哲学にも通じていると考えているのである。

### （補論3）

まず、前者 a) についてはこう言われている。「いかなる対象の叙述も、その必然性にもとづいて行なわれる思考の展開の叙述ほどに厳密で、あくまでも内在的で造形的でありうるものはほかには絶対ないであろう」（*W 5, S. 30*）と。ここでは、造形的ということで、単純なものが叙述されて分節化されてゆくことが意味されている。ちょうど一塊の大理石の中から、部分の区別を持った人物が、取り出されるように全体が彫られてゆくことを造形的と考えているのであろう。学的叙述を造形的とする考えは、すでに『精神現象学』にもある。「そこで一つの命題の两部分〔主語と述語〕の普通の関係の仕方を断固として排除するところの哲学的叙述にして初めて造形的たることを達成するであろう」（*Phän., S. 47*）と。

つぎに後者 b) については、さらにこう言われている。「造形的叙述はそれを聞く者と理解する者の造形的精神を必要とする。自分一個の反省や思いつき、したがって自分流の考えを他人に示そうとばかりするようなそれを冷静に自制することのできるような造形的青年や大人、あるいはプラトンが描いているような、ひたすら事柄に随順して、それに耳を傾けるような者を近世の対話の中に登場させることはできまい」（*W 5, S. 31*）と。ここで、造形的とは、ひたすら事柄に随順して、それに耳を傾けることである。それは、個性などではなくて普遍的言論の場面に身を置き、哲学的対話問答を目指す態度である。

ところで、『論理学』では明言されていないが、造形的叙述と、造形的精神をもってその叙述を理解する者との関係も、造形的である。しかも、さらに重要なことは、ここに、造形的叙述を聞く者や、プラトン対話篇に登場する聞き手が挙げられていることである。そして、その聞き手に対する話し手は、主としてソクラテスである。こうして、ヘーゲル『論理学』における造形性は、ソクラテスの対話問答

の造形性にまで遡及することになる。事実、『哲学史講義』では、対話の造形性が明言されている。「ところで〔ソクラテ斯的対話問答の方法の〕第二の契機は、さらに明確にソクラテスの産婆術と呼ばれたものである。ソクラテスの母親は産婆であったと言われる。したがって、ソクラテスは、何かを人間の精神から世に送り出し、思想の決まりを際立たせる術を母親から習ったわけである。ソクラテスは、ものを問うたり、別のイメージを通じて知識を習得する振る舞いをする。したがって、問答がソクラテス的方法と呼ばれたが、この方法にあっては、たんなる問答以上のものが含まれている。ソクラテスはものを問い、人に答えてもらう。問いには目的があるのに対して、答えは、初めからたまたまのものであるように見える。叙述された対話では、返答する者たちは著者の手中にある。しかし、現実には、ある人に望むがままに返答する人々がいることは、それとは別のことなのである。ソクラテスの対話や、クセノポンやプラトンにあっては、返答する者は、造形的青年たちであるから、会話は、造形的会話と呼ばれうる。彼らは、問われていることだけにはっきりと答える。問いは、彼らがひじょうに答えやすいように設定されている。一切の固有の恣意は、答えから排除されている。私たちは、アテナイ人たちの会話作法は造形的なもの自身を内含していると推論できる」(VGP 2, S. 137)。このような理解は、ミシュレ編『哲学史講義』第1・2版でも同じであるが、アテナイ人たちの会話作法に造形的なものが内含されているということは、ミシュレ編両版では語られていない。これは、後述するように、対話の持つ都市的開放性との関連で重要な違いである。むしろ、ミシュレ編第1版では、産婆術の特性として、「一般的にそうだとされていることから、すでにそのうちに含まれている反対のものを表示すること」(W18, S. 462)が強調されている。これは、産婆術の弁証法的特性を際立たせるために、グリースハイムの表現にあえて付け加えたものであることは明らかである。

#### 引用略号

プラトン著作からの引用に際しては、バーネット版プラトン全集 (J. Burnet, *Platonis Opera*. 5 vols, Oxford Classical Text, 1977) を用い、ステファヌス版全集 (H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578) の頁数と各頁内の abcde の段落を表示した。なお、訳出に際しては、田中美知太郎・藤澤令夫編『プラトン全集』、岩波書店を参照した。

KGW: Nietzsche *Werke. Kritische Gesamtausgabe*. Walter de Gruyter, Hrsg. v. G. Coli u. M. Montinari, München/Berlin/New York, 1967ff. (部門数はローマ数字で表記し、巻数は算用数字で表記する。)

KSA: F. Nietzsche: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*. Walter de Gruyter, Hrsg. v. G. Coli u. M. Montinari, München/Berlin/New York, 1999.

ÜG: L. Wittgenstein, *Über die Gewissheit*. Hrsg. v. G. E. M. Anscombe u. G. H. v. Wright. Basil Blackwell, Oxford, 1979.

VGP: Georg Wilhelm Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*. Hrsg. v. P. Garniron u. W. Jaeschke, Teil 1 (1994); Teil 2 (1989); Teil 3 (1996); Teil 4 (1986), Felix Meiner Verlag, Hamburg.

W: *Georg Wilhelm Hegel: Werke in zwanzig Bänden*. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1969ff.

EAE: D. Davidson, *Essays on Actions & Events*. Clarendon Press, Oxford, 1985.

本論稿は、2018年6月23日の哲学科主催プラトンシンポジウムでの提題を加筆補足している。